

はしがきに代えて——テキストの様式論とレトリック分析——

- (1) 『上海』の初出は次の通りである。①『風呂と銀行』（『改造』昭3・11）、②『足と正義』（同、昭4・3）、③『掃溜の疑問』（同、昭4・6）、④『持病と弾丸』（同、昭4・9）、⑤『海港章』（同、昭4・12）、⑥『婦人——海港章——』（同、昭6・1）、⑦『春婦——海港章——』（同、昭6・11）、⑧『午前』（『文学クオータリ』2、昭7・6）。
- (2) 小森陽一「文字・身体・象徴交換——流動体としてのテキスト『上海』——」（『構造としての語り』一九八八・四・新曜社）、510・520ページ。
- (3) 桂秀実「もう一つの『自意識』——横光利一における書くこと——」（『杼』2、一九八三・一二）。
- (4) 神谷忠孝『横光利一論』（一九七八・一〇、双文社出版）、31ページ。
- (5) ジュリア・クリステヴァ『ポリログ』（足立和浩ほか訳、一九八六・五、白水社）参照。
- (6) 都市の観点からの論としては、前田愛『SHANGHAI 1925』（『都市空間のなかの文学』、一九八二・一二、筑摩書房）参照。
- (7) 政治の観点からの論としては、平岡敏夫『上海——政治小説の系譜——』（『国文学 解釈と鑑賞』一九八三・一〇）参照。
- (8) 植民地の観点からの論としては、金井景子「租界人の文学——横光利一『上海』論——」（『紅野敏郎編』『新感覚派の文学世界』、一九八二・一一、名著刊行会）参照。
- (9) 恋愛と思想の観点からの論としては、二瓶浩明「横光利一『上海』その意図と達成——〈論理〉から〈倫理〉へ——」（『山形女子短期大学紀要』、一九八四・三）参照。
- (10) ベーター・ビュルガー『アヴァンギャルドの理論』浅井健一郎訳、一九八七・七、ありな書房、80、102ページ。
- (11) ヴァルター・ベンヤミン『ドイツ悲劇の根源』（川村二郎・三城満禧訳、一九七五・四、法政大学出版社）。
- (12) テオドール・W・アドルノ『美の理論』（大久保健治訳、一九八五・一、河出書房新社）、263ページ。
- (13) 同書、264ページ。
- (14) ロマーン・ヤーコブソン『言語学と詩学』（川本茂雄監修、『一般言語学』、みすず書房、一九七三・三）。

- (15) グレゴリー・ベイトソン「遊びと空想の理論」(『精神の生態学』上、佐伯泰樹・佐藤良明・高橋和久訳、一九八二・一一、思索社)。
- (16) ロラン・バルト「作品からテキストへ」「作者の死」(『物語の構境分析』花輪光訳、一九七九・一一、みすず書房) 参照。
ミハイル・パフチン「叙事詩と長篇小説」(『叙事詩と小説』、川端香男里訳、『ミハイル・パフチン著作集』7、一九八二・二、新時代社) 参照。
- (17) 竹内敏雄「芸術の様式」(『美学総論』、一九七九・五、弘文堂)、716ページ。
- (18) 岡崎義恵「様式論」(『史的文艺学の樹立』、一九七四・六、宝文館出版)、360ページ。
- (19) ロラン・バルト「作者の死」(前掲『物語の構造分析』、85〜86ページ)。
- (20) スチュアート・ホール「新時代」の意味」(葛西弘隆訳、特集「ステュアート・ホール カルチュラル・スタディーズのフロント」、『現代思想』一九九八・三臨時増刊)。
- (21) 浅沼圭司「象徴と記号——芸術の近代と現代——」(一九八二・四、勁草書房)。
- (22) ヴォルフガング・イーザー「行為としての読書——美的作用の理論——」(饗田収訳、一九八二・三、岩波現代選書)。同書によればレバートリーは、同時代の現実社会や過去の文芸作品からの引用の蓄積であり、テキストと読者との作用の媒介となる基盤を提供する。
- (23) H・R・マトゥラーナ、F・J・ヴァレラ『オートポイエーシス——生命システムとはなにか——』(河本英夫訳、一九九一・一〇、国文社)、及び河本英夫『オートポイエーシス 第三世代システム』(一九九五・七、青土社)。
- (24) 修辞批評 (rhetorical criticism) という名称が一般に行われているが、特定の学派 (イェール学派など) を指す場合があるので、ここではこの名称を避け、レトリック分析と呼ぶ。
- (25) アリストテレス「詩学」(藤沢令夫訳、一九七二・八、『世界の名著 アリストテレス』、中央公論社)、及び『弁論術』(戸塚七郎訳、一九九二・三、岩波文庫)。
- (26) 速水博司『近代日本修辞学史——西洋修辞学の導入から挫折まで——』(一九八八・九、有朋堂) 参照。
- (27) 佐藤信夫「レトリック、修辞、ことばのあや」(『レトリック感覚』、一九七八・九、講談社)、39ページ。
- (28) ミカエル・リファテール『文体論序説』(福井芳男ほか訳、一九七八・四、朝日出版社)。
- (29) ヴォルフガング・イーザー前掲書、51ページ。
- (30)

第一部 《統合》のレトリックを読む——修辞学的様式論の試み——

第一編 宮澤賢治と《統合》のレトリック——その透明と障害——

- (31) 菅野盾樹『メタファアの記号論』(一九八五・四、勁草書房)。
(32) 佐藤信夫『意味の弾性』(一九八六・八、岩波書店)。
(33) ホール・リクール『生きた隠喩』(久米博訳、一九八四・七、岩波現代選書、53ページなど。同じ事柄は『時間と物語』I(久米博訳、一九八七・一一、新曜社)では「ミメシスIII」と呼ばれている)。
(34) ロマーン・ヤーコブソン『言語の二つの面と失語症の二つのタイプ』(前掲『一般言語学』)。
(35) リクール『生きた隠喩』(前掲)、213ページ。
(36) I・A・リチャーズ『新修辞学原論』(石橋幸太郎訳、一九六一・六、南雲堂)。

I (もの)のシネクドキー——「岩手山」「ぬすびと」——

- (1) グループム「提喩」(『一般修辞学』、佐々木健一・樋口桂子訳、一九八一・一二、大修館書店)。
(2) 佐藤信夫「提喩」(前掲『レトリック感覚』)。
(3) 大塚常樹「宮澤賢治、心象宇宙のレトリック」(『宮澤賢治 心象の宇宙論』、一九九三・七、朝文社)は、「岩手山」のレトリックに触れて「『しろく澱むもの』は、試験管の底に溜まった『硅酸の澱』と、『岩手山』との類似性からくる、〈隠喩〉と考えると解り易い」と述べる。理論的には、提喩が具体的対象とカテゴリー間の変換であるのに対して、隠喩はカテゴリーを介した具体的対象と具体的対象との間の変換である。大塚は「澱むもの」と「岩手山」との関係は常識的ではなく、「比喩はある程度共通の認識コードがあつてはじめて成り立つものではなからうか」とし、「コロイド宇宙観」によって右の解釈を提起する。しかし、「硅酸の澱」と「岩手山」との類似性も、それほど常識的なものとは言えない。日常化した比喩や諺とは異なり、挑戦的な文芸テキストの場合には、テキストと読者との間の認識コードの共有そのものが、そもそもレトリック的